

## Smokeにおける母親と母性

田中紀子

### 要旨

1995年に公開された*Smoke*は、Paul Austerの短編小説“Auggie Wren’s Christmas Story”（1990年）を基にして、Wayne Wangの監督の下に制作された映画である。登場する男性達の事実と虚構を織り交ぜた語りと、彼らの友情が主要な内容であり、人間同士の触れ合いを通しての相互の癒しが1つのテーマとなっている。一方、女性達は2次的だとみなされがちではあるが、男性達にとって重要な存在であり、中でも母親としてのあり方やその母性が示す意味は大きい。男性にも内包され得る母性は、特にAuggieに現れている。*Smoke*のテーマに大きく関わってもいる母親、そして母性について見てゆく。

キーワード：*Smoke* 母親 母性 Ruby Doreen Aunt Em Granny Ethel Auggie

### はじめに

短編小説“Auggie Wren’s Christmas Story”（1990年）に魅了されたWayne Wangが、その作者であるPaul Austerに映画化の話を持ちかけ、Austerが書き上げた脚本を基に映画*Smoke*（邦題『スモーク』）が制作された。通常その核を成すのはAuggie Wren、Paul Benjamin、Rashid Coleであり、さらにRuby McNuttとCyrus Coleを加えた5人とされている。彼らはそれぞれがすぐに嘘だとばれる話、真実か嘘か決めかねる話、聞き手をまんまと信じこませるホラ話を語る、または聞かされることになるのだが、そういった「嘘」を介して彼らの間に結びつきが生じ、信頼や思いやりが築かれてゆく。

Mark Brownも述べている通り、*Smoke*の「関心事はあくまでもストーリーテリングと友情」（186）であろう。この場合の「友情」は、AuggieとPaul、およびRashidの間におけるものを指している。しかし、彼ら男性達にとって重要な関係にある女性達も興味

深い存在となっている。本稿では彼女達、特にその母性に目を向けたい。また、作品の最初から登場し、最後を締めくくるAuggieという男性に内包される母性についても考える。なお、ここではAusterによるオリジナルの脚本を基にするが、このテーマに関して映画では削除、追加、変更が行われた部分にも目を向けることにする。

## I 軽視される女性

ニューヨークのマンハッタンからブルックリンへと電車が走ってくる映像の後、ブルックリンのあるタバコ屋のカウンター内にいる雇われ店主Auggieが映し出される、というのが脚本のスタートである。40代半ばと思われるAuggieは、葉巻の値段に関して若い男性客をからかう。92ドルという高値の葉巻については「下着なしで、木綿の薄手のドレスを着た18歳の娘が巻いたのだらう。胸の谷間に小さな汗の玉が幾つも浮かんでいてね」と言い、78ドルの葉巻を巻いたのは「多分パンティーをはいていた娘」、また56ドルの葉巻を巻いたのは「<sup>2</sup>コルセットをつけた娘だ」といい加減な思いつきを口にする。カリブ海の島で葉巻作りに従事する貧しい娘達に内在する人間性、母性は無視して、単なる性的な対象として冗談を飛ばすAuggieは、「薄汚い風采。もじゃもじゃの髪、2日間伸ばしたままの髭、ブルージーンズに黒いTシャツ。片方の腕に手の込んだ刺青」(25)といった外見も伴って、低俗で危なっかしい軽薄な中年男性とのイメージが打ち出されている。

この場面には、ここを溜まり場とする場外馬券売り達もいて、教育程度の低さがわかるセリフを彼らが発することも相まって、ブルックリン葉巻商会に関わる男性達には女性を軽視する傾向があると観客に思わせてしまう。また、ここでしばらく働くことになる十代の黒人青年Rashidは、店で販売されている*Penthouse*誌の白人女性のヌード写真のページに夢中になり、蛇口から細く流れる水が葉巻を水浸しにさせていることには気づかないほどである。Rashidの性的な関心は健全な若い男性のものであることは明らかであるし、Auggieには恋人との別れや戦争といった辛い過去があり、その哲学的な思索や他者への思いやりなどは次第に示されてゆくのだが、この作品における女性を論じる際には、序盤でのAuggieの冗談と、*Penthouse*のグラビアページに表れた女性の商品化という、男性社会に垣間見られる母性を無視した一種の「暴力」には触れておくべきであろう。

## II 殺される母親

暴力の最たるものである殺害であるが、*Smoke*では実際の殺害、比喩的な殺害が取り

上げられている。その犠牲者となっているのは母親であり、それも複数である。

この母殺しに話を進める前に、母性という語の意味を確認しておこう。「子供を無条件に受けとめ、保護し、育てる能力」というのが一般的に理解されている母性だと言ってよいであろう。その程度には個人差があるが、男女を問わず人間の中に存在し得るものである。さらに広義に解釈すると、他者の存在を受け入れ、癒し、生きてゆく力を与える能力ともなり、また母親と出産が不可分であることから、新たなものを生み出す力を含めることもできるだろう。

### Ellen

Smokeではまず、妊娠して胎内に子供を育てている途中の女性の命が絶たれたことが語られる。Paulの妻Ellenである。2年前に銀行強盗の流れ弾にあたって亡くなった時、彼女は妊娠4、5か月であり、新たな生命の誕生を夫婦で楽しみにしていた矢先であった。そして、Paulはこの事件後作品が書けなくなっている。思いついたアイデアを発展させ、選び抜いた言葉を組み合わせて文章にし、それらを紡いで一つのまとまった形を持つ作品に仕上げ世に出す行為は、比喩的な「養育」「出産」と称せるだろう。とすると、母親になるはずの妻が殺されたと同時に、夫である男性Paulの中の母性も殺されてしまったことになる。喫煙量は一日に葉巻2缶にも達することもあり、Paulは生き甲斐や生きる楽しさを感じられず、自らの生命をいたわる余裕も失くしているのである。

### Louisa

生きる気力を半ば喪失したPaulが、街中をぼんやり歩いていてトラックに轢かれる寸前に救うのが、Rashidと名乗る黒人青年である。彼の母親Louisaは、夫Cyrusが酔って運転する車に乗り、トラックとの衝突で死亡している。彼女は、育児を通して母性を豊かにしてゆく途中で亡くなったことになり、Rashidは幼年4歳にして父親に母親を殺されたわけである。ブルックリンの低所得層向けの団地で育ち、現在16歳の彼は、名前も住所も両親についても、現実とは全く異なる話を即座にでっちあげてPaulに語る。彼には両親が揃っていて、マンハッタンで裕福な生活をしているというのである。母親に代わって育てた伯母のEmは、それを知らされて「あの子が想像力豊かだってことはずっとわかってたけど、今や自分の一生を丸っきり別のものに作り上げたんだね」(64)と言う。脚本においても、映画においても、Rashidが母親を慕う言葉をつぶやいたり、母親の死を思い起こして悲しんだりするという場面は無いが、虚構話を容易に作り上げる旺盛な想像力は、実の母親を失ったことによる心の痛手に大きく起因していると考えてよいであろう。

RashidがCyrusに雇われて間もなく、Cyrusが最初の妻と自分の腕を失ったことにつ

いて語る場面がある。話題は再婚相手のDoreenにも及び、「これ以上ないっていうぐらいの最高の女だ」、また2人の間に生まれ自分と同じCyrus Juniorと名づけた2歳の息子については「あの子は百万人に1人のいい子だ。ほんとにやんちゃな奴だよ」と相好を崩す。「それを見るRashidがみるみるうちに動転した顔つきになる」(83)となっている。映画では、夕方迎えに来たDoreenとCyrus Juniorに向ける喜色満面のCyrusは描かれているが、溢れんばかりの新しい家族への愛情を示す場面も削除せずに取り入れた方がよかったのではないだろうか。

### Ruby

Ruby McNuttは、Auggieの昔の恋人である。Auggieがタバコ屋のオーナーに語るところによれば、「俺のたった1人の本気で愛した女」(44)となっている。彼女に贈るネックレスを万引きして逮捕されたAuggieが海軍送りとなって戦場へ赴いている間に、RubyはBillという男と結婚し、「夫婦喧嘩の最中に、そいつに片目をえぐり取られ」(45)離婚したという。そのあと生まれた娘Felicityは18歳になり、怪しげな男と駆け落ちして今や妊娠4か月、おまけに麻薬浸りとなっている。娘を助け出すのに必要な金銭力はRubyには無く、遠路はるばるピッツバーグからAuggieに会いに来る。Billと別れたあとRubyはFrankという修理工と再婚し、15年前に彼とも別れたことになっている。かなり異性関係が奔放だった女性なのである。

しかし、女手一つで娘Felicityを育ててきたRubyは、母親としては気概があり、愛情深い面を見せる。後に彼女自身が「あんたの子かもしれない。でもそうでないかもしれない。数字的には5分5分の確率よ」(130)と正直に述べることになるのだが、自ら体に害を与えながらすさんだ生活に陥っている娘と、さらに生まれてこようとしている孫を何が何でも守りたい彼女は、18年ぶりに再会したAuggieに、彼がFelicityの父親だと断言する。そして辛辣な応対を続けるAuggieに、思わず興奮して泣き出し、大声を張り上げるのである。作者Austerの最初の案には、このRubyという人物は無かった<sup>3</sup>そうだが、子供のためにはなりふり構わないRubyの存在感は大きい。

### Felicity

Felicityの住処へAuggieを有無を言わず連れて行くRubyだが、娘の方は母親に対して敬意も愛情も全く示さない。それどころか、母親を徹底的に蔑み、下品な言葉でのしる。「どっかの犬があんたのケツにファックして、あたしは先週生まれたのよ」や「あんた、ほんとにこいつにファックさせてやったの？」(96)などで、Auggieもたじたじとなるほどである。父親のいない家庭であったこと、母親の派手な男性交際が、Felicityの母親への反抗的な態度に直結しているとは即断できないが、彼女はここで一

種の母殺しを行っている。

彼女はまた、AuggieとRubyの訪問の2日前に中絶を実行したと告げる。すなわち、彼女は自分の中の母性をも削ぎ取る行為をしたわけである。タバコの煙を猛烈に吹かした後、彼女は「バイバイ、赤ちゃんってわけよ」(96)と平然と言っている。脚本では、同棲しているヤクザ男が今にも帰って来そうだからと、母親と「父親」を彼女がそそくさと追い出すセリフでこの場面は終わっていて、その顔は無表情なのか、あるいはどのような感情が表れているかは記述されていない。一方映画においては、部屋を出て行く2人の後ろ姿を見送るFelicityがアップになり、その目には次第に涙が溜まってゆく。彼女は虚勢を張っていただけであって、実は母親と「父親」に素直に甘えたかったのか、母親に浴びせた罵詈雑言を後悔したのか、また本心では子供を産んで母親になることを望んでいたのであって、彼女の母性は実は壊れてはいないのではないかなど、Felicityの内面について様々な想像を抱かせる仕上がりとなっている。

### Ⅲ 育み、守り、癒す母親

#### Aunt Em

Rashidは母親を事故で失い、父親は母親の一族から縁を切られることになってしまうのだが、育ての母となった伯母Emの愛情が豊かであったことでかなり精神的に救われたに違いない。Paulとの出会いの後、Rashidは換金所を襲った強盗が落とした現金を拾ったため、HenryとEmの家を出て、Paulのアパートに転がり込んでくる。映画には取り入れられていないのだが、元の脚本には、Rashidが自分の身が無事であることをこっそりEmに電話で知らせる場面が見られる(56)。FelicityとRubyの母子関係に生じているような感情のねじれは、Rashidと伯母の間には無いことがわかる。

Emは非常に気丈な女性である。甥が白人成人男性の慰みものにされていると思ひ込み、凄まじい勢いでPaulのアパートへ乗り込んでくる。ト書きには「会社勤めらしい服装」(62)とのみ書かれているが、映画では彼女は真っ赤なジャケットと真っ赤なハイヒールで、敵意をむき出した形相で現れる。Rashidが言うように、ブルックリンでは黒人と白人の住む地域は「全く別の銀河系」(90)であり、Emにとっては予想もつかない危険地域に踏み込むようなものだったと思われるのだが、彼女の強さはまさに子供のために命がけの行動をも厭わない「母親」のものである。

#### Doreen

Smoke中で唯一健全な母親の姿を見せるのは、Cyrusの2度目の妻のDoreenである。明るく澁刺とした女性であり、最初の妻と片腕とを失ったCyrusにとっては、家族を持

つことの幸福感と、感謝しながら前向きに生きる力の源泉となっている。Doreenは美容院での仕事もこなしており、夫が始めたばかりの自動車修理工場の収益があまり伸びない部分を金銭的に助けてもいる。我が子と知らずにCyrusが雇い、日曜日を1人で過ごしているRashidを、家族揃ってのピクニックという楽しいひと時に誘い出そうとするのも彼女である。

出かけようとした時に賭けつけたAuggieとPaulに、Rashidは自分の素性を白状させられることになり、彼とCyrusとの殴り合いが始まる。止めようと割って入ったAuggieの足にDoreenは蹴りを入れる。夫を守ろうと必死な妻である。また、金属製の鉤爪のようなフックの付いた義手を振り上げたCyrusに向かって、Doreenは「この子はあんたの息子なのよ、バカなことしないで！あんたの息子よ！自分の息子を殺したいの！」(142)と金切り声で叫ぶ。その声に、Cyrusはハッと我に返り、泣き崩れて騒動が終結する。脚本によれば、次の場面では皆がテーブルを囲んで座り、昼食を食べている。Cyrus Juniorは異母兄弟であるRashidの腕に抱かれていて、男性全員が無言の中、Doreenのみが喋っている。その内容はCyrus工場の経営状態についてなのだが、彼女の神経は高ぶったままで、まだ平静さを取り戻していない印象を与える。

一方、映画ではかなり異なった情景となっている。テーブルの上に昼食が広げられているのは同じだが、誰も食べ物に手を伸ばしてはいない。リクライニングチェアに体を横たえているAuggieは押し黙ったまま。CyrusとPaulは葉巻を勧めあう短い言葉のやりとりをするのみ。テーブルに肘をついてうなだれていたRashidは、顔を上げて父親を睨みつける。Doreen 1人が背筋をしゃんと伸ばして椅子に座り、子供を腕に抱いている。しばらくしてCyrus Juniorの頭を撫で始めたRashidにDoreenは頷いてみせ、そのあと片手を伸ばし、Cyrusをなだめるようにその膝辺りを押さえる。彼女の優しさと力強さがかもった視線は、順に全員に向けられる。きゃしゃな体つきのDoreenではあっても、2歳の子供も含めた5人の男性を落ち着かせ、結びつかせ、包み込む存在となっているのである。*Smoke*では、マイナーなキャラクターとして扱われがちなDoreenであるが、ここで彼女が果たしている役割は大きい。このピクニックの場面はRashidに関するストーリーの結末となるのだから、映画におけるようにDoreenが穏やかではありながら毅然とした理想的な母親像を示す方がしっくりすると言えるだろう。母親を失ったRashidが、年齢は若くても包容力があって信頼のおけるDoreenとはこの先心地よい関係を続けてゆけることが暗示されている。また彼女の支えがあることによって、RashidとCyrusの父子関係にも光が差し始めていることが感じさせられる。

#### April

穏やかな気質と将来への希望を感じさせることによってこの作品の救いとなっている



もう1人の女性がAprilである。彼女は書店でアルバイト店員として働いている大学院生で、数年のブランクを経て作品を書き始めたPaulがRashidを伴ってその店を訪れる。文学専攻でPaulの小説を気に入っているAprilは、Paulとの会話を最初から気持ちよいテンポで楽しく進める。

例のピクニックの次の場面は、Auggieの店となり、たむろする男たちの服装が季節が秋になっていることを示していて、脚本では11月とされている。店に入ってきたPaulは、いつもの葉巻を1缶だけ注文する。「減らそうとしてるんだ。僕の健康を気にかけてくれる人がいてね」(145)と嬉しそうに言うことから、Aprilとの交際が順調であることがわかり、Auggieも笑顔を見せる。Paulには大手新聞社からの投稿の依頼もあり、今では恋愛面でも仕事面でも幸福が訪れている。映画からは削除されているが、脚本では、Aprilが夏に苦しみながら取り組んでいたのはMelvilleの*Pierre, or the Ambiguities*であったとなっている。彼女がこの小説の「曖昧性」に論理的な筋道をつけて論文を完成させ、文学という共通点によりPaulとの結びつきが強化されたことは想像に難くない。またPaulの既刊本の1冊のタイトルが*The Mysterious Barricades*であったのは興味深い。妻の死後、他人との間に一種の「障壁」を設けて積極的な関わりを避けてきたPaulであったが、黒人Rashidと人種の「障壁」を越えた関わりができたわけである。さらに白人と中国人との混血であるAprilとは、人種のみならず性別の「障壁」も越えることになり、2人にとっては彼女の名前が示すように明るい「春」が期待される。最初の子供を誕生前に失ったPaulであるが、Aprilが新たな生命を生み出す母親となる可能性も生じているのである。

#### IV Auggieの中の母性

Smokeに最初から登場し、最後の場面ではPaulと笑みを交わして葉巻の煙をくゆらせあい、人生のゆったりした時間と友情の尊さを感じさせるAuggieは、主要人物の中でも重要な存在である。AusterがかつてPaul Benjaminという名で作家活動を行っていたことを考えると、この作品では小説家として登場するPaul Benjaminが作者の分身であるとまず思いがちだが、実際はAuggieの方に重点が置かれているようである。すでに述べたように、Auggieは女性を単なる性的な対象として軽口を叩くことがある。また自分を見捨てて他の男性に走ったRubyに容赦ない暴言を吐いたり、知的理解力の劣るJimmy Roseを怒鳴りつけるなど、乱暴な面を何度か見せることもあるが、実は彼の母性の部分がこの作品の人々を救っていると言えよう。

彼の店では黒人1人と白人2人の常連が集まってはアメリカの情勢、女性や野球談議に花を咲かせる。教養レベルの低い男たちではあるが、Auggieは彼らに合わせたり、

彼らをからかったりして、店を快適な空間にしている。Jimmy Roseには客たちの話の全部が理解できていないとは思われるが、掃き仕事などの無い時には店内に自分の場所を確保している。孤独な男性たちにとっての居心地のよい一種の「家庭」を、Auggieは大都会の片隅に築いているのである。

Auggieは、客の1人であるPaulに対してもそれほど親しくなる前からいたわりを示している。愛妻を亡くして意気消沈していることを知っているAuggieは、Paulが店を出て行こうとする時に「元気でいろよ。俺がしないようなことをやるんじゃないぜ」(33)と自殺を思いとどめさせようとさりげない言葉をかけているのである。

彼ら2人の心の距離がぐんと近づくのは、Auggieの趣味、というより執念となっている写真撮影を通してである。Auggieは、14冊に上る彼のアルバムの中から数冊を順にPaulに見せ、その中にPaulは亡き愛妻の写真を見つける。脚本ではPaulは単に「感極まって涙ぐむ」(52)となっはいるが、Auggieの動作については書かれていない。しかし映画ではPaulは頭を抱えて激しいむせび泣きを始め、Auggieはその肩に回した手に力をこめ、横顔を見守っている。自分の悲しみをさらけ出したPaulに対し、Auggieは単なる客と店主の関係を越えた優しさ、配慮を見せている。Austerはこの映画の監督Wangについて「最高の小説家が持つ配慮と忍耐力をもって、物語を語ってゆく」タイプであり、「登場人物の内面生活に共感し、物事をせかさない」<sup>5</sup>監督であると評価しているが、その特徴がよく生かされている1つがこの場面であろう。

写真というと、Auster自身がLarry McCafferyとSinda Gregoryによるインタビューにおいて「ある意味で詩はスチール写真を撮るようなもの。(中略)ものごとの本質や根本的な信念をテーマとし、言語の純粋性と一貫性を獲得したくて詩を書きました<sup>6</sup>」と述べていることが思い起こされる。Auggieの写真は、単にブルックリンの3丁目と7番街の角で毎朝8時に4千日以上写し続けたものである。Auggieは言葉に徹底的にこだわる詩人、被写体を選び抜く職業的な写真家ではないので、特に「ものごとの本質」の探究や「信念」を意識してはいなかったはずなのだが、出来上がったものは「俺のささやかな場所の記録」(50)となり、結果としてそこにはこの場所への彼の愛情という「純粋性」と「一貫性」が滲み出ている。その写真は、最初Paulには「芸術的」な範疇からは程遠いものだとしか思えず「みんな同じじゃないか」(49)、「みんな同じだよ」(51)と繰り返すのだが、時間の流れの中で切り取られた一瞬一瞬における季節や天候を味わったり、その時偶然に写った人の生活や感情について想像したり、時間の経過に伴う人々の変化を読み取ることをAuggieから教えられることになる。「毎日太陽からの光は、違った角度で地球を照らすんだ」(51)というAuggieのセリフは、作家Paulにはこれまでと違った角度で人間や事象を解釈し描写してみるというアドバイスになったはずである。



夜の静かなひとときに、心の整理と、執筆におけるヒント、そして友情という大きな収穫をPaulはAuggieから得たのである。この次の場面では、やかましく鳴るインターホンのブザーの音にも気づかないほどPaulは「恐ろしい勢いで」(52) 著作に熱中している。この日の夕刻の閉店時に、その日で3 缶目の葉巻を購入するためAuggieの店に駆けつけたほどのヘビースモーカーぶりを見せていたPaulだが、この時には葉巻は吸っていない。命取りになりかねないほどであった喫煙量を無意識的に軽減できる時間も生まれたのである。元の脚本には、これ以前に葉巻を吸いながら執筆を行っている場面が描かれているが、映画のようにその場面を省き、Paulは全く文章を作ることができなくなっていたと想像させる方が効果的であろう。人が大きな損失による自滅的な落ち込みから脱し、再び「生産」力を回復するには、自分を理解し支えてくれる他者の存在、特にその母性の部分が必要であることを改めて考えさせられる箇所である。

Auggieについて見てみると、彼はRubyをいったんは冷たくあしらってはいたが、5千ドルが手に入るとそれを自分の損失の埋め合わせに充てず、FelicityのためにとそっくりRubyに渡す。Felicityが自分の子供であるかをRubyに尋ね、「そうかもしれない。でもね、そうでないかも。数学的に言ったら五分五分なの。あんたが決めてよ」(130)という返答を得た後も、Auggieは申し出を撤回しない。一人の若い女性の人生の好転に手を貸すことを良しとするのである。彼はまたPaulと共に、Rashidに素性を明かさせて父親Cyrusとの関係をスタートさせることにも努める。「典型的なAusterの主人公は男性であり、ストーリーテラーであり、そして様々な理由から愛する者達や社会から孤立した状況にある」(4) というJames Peacockの指摘通り、Auggie、Paul、Rashidはこのタイプに当てはまっているのだが、彼らは互いに言葉と感情を交し合うことにより、以前の自分とは異なった態度や行動を示し、他人への思いやりと繋がりを大切にしようとする方向に向かうのである。

## V 語られる母親

### Granny Ethel

AusterはMark Irwinとのインタビューで次のように語ったことがある。

煎じ詰めれば、私の作品は徹底した個人的絶望、世界に対する無力感と底無しでのヒリズム、私たちがはかなくていずれは死ぬべき存在であるという事実、言語の力不足、そして人間の孤立に根差していると思います。と同時に空気を胸いっぱい吸い込み、自分が生きていると感じるときのとてつもない喜びや美しさ、自分の肌で生きていると感じるときに浮き浮きした思いをも描きたいと思っています。<sup>7</sup>

Smokeに目を転じると、CyrusとRashid父子の雪解けも間近いことを暗示するピクニッ

クの場面や、AuggieがRubyに大金を渡す場面があるのだが、そこに漂う「喜び」の雰囲気ではAusterは作品を終えない。ポストモダン作家に位置づけられることの多いAusterには、古典的な「偽善的で甘ったるく、感傷的で安っぽい代物が溢れ出すようなもの（中略）夢が叶う物語、大人向けのおとぎ話<sup>8</sup>」に仕上げる意図はさらさら無い。登場人物達についても、葉巻の密輸を企てていたり、強盗が落とした金を着服したり、といったように黒か白かに色分けできない人間達であり、彼らの住む世界も「価値がカオス化したパラドキシカルな世界、善いことと悪いこと、黒と白が逆転し、境界が煙（スモーク）でぼやけた世界<sup>9</sup>」であるとの解釈は的確であると言えよう。

*Smoke*の最後において、AuggieはクリスマスにまつわるエピソードをPaulに語る。自分の店で起きる雑誌の万引き、Rashidの出身地である低所得者用団地の地名、新聞で見かけた強盗犯の名前などを取り入れ、あたかも自分が実際に体験したことであるかのように話を展開してゆく。この話に登場するのがEthelという老婆である。Auggieによれば、彼女の孫Rogerが落とした財布をクリスマスに届けるのだが、その時に彼はRogerのふりをし、また目の不自由なEthelもAuggieが実の孫であるかのように振る舞う。Auggieはでっかあげた近況を話して聞かせ、食事とワインで共に楽しく過ごし、Ethelが眠ってしまった間にカメラ1台を盗んで出て行ったというのである。その後3、4か月経ってカメラを返しに行くと、別の家族が住んでいて、多分Ethelは死んだのだろうということになり、良心の呵責を見せるAuggieに対して、Paulは「最後のクリスマスと一緒に過ごしてやった」のだから「いいことをしてやったんだよ」（155）と慰める。

ここで興味を引くのがEthelの描写である。彼女は80～90歳という高齢で盲目、一人暮らしの寂しさも相まってAuggieのホラ話を丸ごと受けとめるというのである。そして全く安心しきって眠ってしまい、Auggieが盗みという行為を働くことに気づかない。「祖母」という設定になっているが、Auggieにとって望ましく思える母親像がEthelには示されていると言えるのではないだろうか。すなわち、子供を全面的に肯定し、受け入れ、一緒にいることにただ嬉しさを表し、多少の悪戯を黙認する母親である。さらにAuggieは彼女を「死」に追いやることによって、子供の罪を咎めさせはしない。Auggieの語るクリスマス・ストーリーには、こうして母親に関しての息子側からの身勝手な願いも含まれているのである。映画ではこの場面のあと白黒の画面に切り替わり、AuggieがEthelを訪れる時の様子が映し出されるのであるが、そこに歌が流れ、“You're innocent when you dream”（夢を見る時は無邪気）という歌詞がゆっくり繰り返される。そのあとにはJerry Garciaの歌う軽快な“Smoke Gets in Your Eyes”（煙が目にしみる）が続くため、Auggieの「無邪気な」作り話を楽しもうというムード作りとも受け取れる。しかし、これらの歌はどちらも永遠を誓った恋人達の関係が破綻することを扱っている<sup>10</sup>のであり、無条件で子供を愛する母親に対する皮肉な効果を生んでいるとも言えよう。

## おわりに

Smokeの女性達について、Jesús Ángel Gonzálezは「2次的人物達であり、ファン(April)、対象物(Rashidが読むエロチックな雑誌)、または男ばかりの心地よい場を乱す危険人物(Ruby)としてのみ登場する<sup>11</sup>」という指摘を行っているが、これまで見てきたように彼女達はそれ以上の意味合いを持っていると言える。この作品には母親である(または「母親」役を引き受けた)女性、あるいは母親になろうとしている女性が命を失ったり、自ら母親になることを乱暴に中断したり、あるいは逆に母性によって男性を精神的に育み、和ませる様子、また全面的に男性を受け入れることによって癒しを与える様子などが描き出されている。さらに、Auggieという男性における母性も盛り込まれている。

作者Austerは、父親の死の直後に『孤独の発明』(*The Invention of Solitude*, 1982年)を生み出し、その中に彼の父親への想いを読み取ることができるが、彼が母親に言及したことはほとんど無い。我々が知り得るのは、彼女が高卒であり、文学的な趣味は無かったこと程度である<sup>12</sup>。だが、このSmokeにおける様々な母親の描写からAusterの内面に存在する母親、母性への想いを想像することも読者には許されていると言えよう。

### 注

- 1 Rashidの本名はThomas Jefferson Coleであるが、脚本にならって本稿ではRashidで通すことにする。
- 2 Paul Auster, *3 Films: Smoke, Blue in the Face, Lulu on the Bridge* (New York: Picador), pp. 28-29. 以下テキストはこの版を用い、ページ数を引用箇所のあとの( )内に示す。日本語訳には『スモーク&ブルー・イン・ザ・フェイス』(柴田元幸他訳)を参考にした。なお、この箇所のAuggieの冗談は、映画には盛り込まれていない。
- 3 Jesús Ángel González, "Smoke and Illusions: An Interview with Paul Auster," *Revista de Estudios Norteamericanos*, n°12 (2007), p.59.
- 4 Paulが精神的に回復し、他人の許容度を高めることの重要性を考えると、Aprilが白人ではなくアジア系である意味は大きい。その点において、映画ではApril役の女優がアジア系でないことは残念である。
- 5 *3 Films: Smoke, Blue in the Face, Lulu on the Bridge* (New York: Picador), p.7.
- 6 「オースターとの対話(一)聞き手: ラライ・マキャフリイ、シンダ・グレゴリー」『ポール・オースター』(飯野友幸編著)(彩流社、2006年) p.27.
- 7 「オースターとの対話(二)聞き手: マーク・アーウィン」『ポール・オースター』 p. 49.
- 8 *3 Films: Smoke, Blue in the Face, Lulu on the Bridge*, p.161.
- 9 藤井伸子「『スモーク』 ポール・オースターのポストモダンのクリスマス・ストーリー」(奈良県立看護短大紀要第4号 2000年) p.115.
- 10 "Innocent When You Dream"には「墓地の中を恋人と二人で走る」、「Smoke Gets in Your Eyes」には「恋をする者は盲目」だが「恋の炎は消えてしまう(dies)」とあり、どちらにも死に関連する語が使われている。

- 11 Jesús Ángel González, "Words Versus Images: Paul Auster's Films from *Smoke* to *The Book of Illusions*." *Literature Film Quarterly*. 2009, Vol.37 Issue 1, p.34.
- 12 「オースターとの対話 (一) 聞き手: ラリイ・マキャフリイ、シンダ・グレゴリー」『ポール・オースター』 p.18.

#### 引用文献

- Auster, Paul. *3 Films: Smoke, Blue in the Face, Lulu on the Bridge*. New York. Picador. 1995.
- Brown, Mark. *Paul Auster*. Manchester: Manchester University Press. 2007.
- González, Jesús Ángel. "Words Versus Images: Paul Auster's Films from *Smoke* to *The Book of Illusions*." *Literature Film Quarterly*. 2009, Vol. 37 Issue 1, pp.28-48.
- "Smoke and Illusions: An Interview with Paul Auster," *Revista de Estudios Norteamericanos*, n°12. 2007. pp.57-67.
- Peacock, James. *Understanding Paul Auster*. Columbia: University of South Carolina. 2010.
- 飯野友幸編『ポール・オースター』彩流社、2006年。
- ポール・オースター『スモーク&ブルー・イン・ザ・フェイス』（柴田元幸他訳）新潮社、1995年。
- 藤井伸子「『スモーク』ポール・オースターのポストモダンのクリスマス・ストーリー」奈良県立看護短大紀要第4号、2000年。pp.109-116.

[映画] *Smoke*. 監督Wayne Wang. Miramax. 1995年。

[歌] "Innocent When You Dream" Lyrics

<http://www.metrolyrics.com/innocent-when-you-dream-lyrics-tom-waits.html>

"Smoke Gets in Your Eyes" Lyrics

<http://www.stlyrics.com/lyrics/heartsinatlantis/smokegetsinyoureyes.htm>